

「寛容性がもたらす幸せ」

～絵本「ぼくのはなさいたけど…」(金の星社) 山崎陽子作・末崎茂樹絵から～

校長 飯塚 進

「ぼくのはなさいたけど…」という絵本があります。概要は以下のとおりです。

こぐまのトトは、森の中の秘密の場所に花畑を作りました。花を育て、花束をお母さんの誕生日プレゼントにするためです。毎日水をあげました。かわいい芽が出て、葉が出て、ぐんぐんのびて、とうとうたくさんの花のつぼみができました。開き始めているものもあります。いよいよ今度の日曜日がお母さんの誕生日です。トトはみんなに内緒にしながらも、花束を渡すことができる喜びでいっぱいです。

次の日、森へ行って、花を数えてみると、なぜか減っていました。次の日も行ってみたら、また減っています。不思議に思ったトトは、花畑の横に、「ぼくの大事な花です。とらないでください。」と書きました。

しかし、残念ながら次の日も減っていました。トトは木のかげに隠れ、何が起きているのかを確かめます。すると、誰かが、トトの花畑にやってきて、花をとったのです。

「ぼくの花だぞー。とるなったらあ！」トトは大声で叫びながら、飛び出して行きました。「えっ！」と言って振り返ったのはモグラの女の子でした。名前はモイラと言います。トトはこの花の意味を説明しました。

モイラは、「ごめんなさい。私、まだ字が読めないの。お母さんが病気で寝てるから、喜ばせてあげようと思って。でも、私のうちは、土の中だからすぐにかれちゃうの。ごめんなさい。ごめんなさい。」と言いました。トトは、モイラがかわいそうになって、「それは君にあげるよ。」と言いました。モイラは喜んで帰って行きました。しかし、トトがお母さんに花束にしてあげようと思った花は2つだけになってしまいました。

お母さんの誕生日の日曜日。2つのきれいな花が咲いていました。それを見たトトは、モイラの顔が浮かびました。そして、「この花、1つ残しておくからねえ！」と大きな声で言いました。

たった1つになってしまった花。花束にできなかったために、悲しむトトに、お母さんは言います。「とってもうれしいわ。あなたのお花で、二人のお母さんが喜んだんですもの。トト、すてきなお花ありがとう。」

「寛容性がもたらす幸せ」があると思います。子どもたちには、友達に対して寛容性をもってほしいと願います。やがて社会そのものが寛容性に満ち、子どもたちが自分らしさを発揮することに何の不安もない毎日を過ごしてほしいと考えています。